

神奈川県 の 埴 輪 (Ⅱ)

— 外来系埴輪の分布と交通路(前)—

稲 村 繁*

The Haniwa (clay hollow figure) in Kanagawa Prefecture (II)

— Distribution of Foreign Origin Haniwa and Traffic Route —

Shigeru INAMURA

The number of remains where Haniwas (clay hollow figures) were unearthed has been counted up to 62 remains until now. However, when the numbers of remains where only a few shards were unearthed and where no burial mound exists are counted, the number of the remains where more Haniwas could be standing actually on the burial mound is approximately 40. At these approximately 40 remains, we see more Haniwas which make us think that these were “ of foreign origin ”, directly moved from remote Saitama and Gunma Prefectures, or were shaped and baked in Kanagawa Prefecture by artisans' group came from remote areas,

When we see the locations of the burial mounds on which “ Haniwas of foreign origin ” were standing, we also understand these mounds are located at not only the points assumed as important for the traffic, but also the distribution of such mounds' locations was changing depending on the time. Therefore, this paper shows a study on the relation between the burial mounds on which “ Haniwas of foreign origin ” were standing and the traffic route, and further, a background of the burial mounds constructed at the important point for the traffic.

目 次

- 1 はじめに
- 2 神奈川県内における「外来系埴輪」の様相

* 横須賀市自然・人文博物館 Yokosuka City Museum, Yokosuka, 238-0016 Japan.

原稿受付 2017年8月10日 横須賀市 博物館業績 第722号

Key Words: Ancient Burial Mound, Foreign Origin Haniwa (Clay Hollow Figure), Kanagawa Prefecture.

キーワード: 古墳, 外来系埴輪, 神奈川県

現在までのところ、神奈川県内では埴輪の出土が 62 遺跡で確認されている。ただし、小破片のみの遺跡も多く、墳丘が現存しないものも含め古墳に樹立されていたと考えられるのは 40 遺跡程度である。このなかで、埼玉県・群馬県など遠方から直接供給された、あるいは遠方の埴輪工人集団が神奈川県内の古墳近傍に移動し製作をおこなった「外来系埴輪」と考えられる埴輪が多数存在している。

これら「外来系埴輪」を樹立する古墳をみると、時期により分布状況が変化しているばかりでなく、交通の要衝と推定される地に築造されていることもわかる。そのため本稿では、「外来系埴輪」樹立古墳と交通路との関係、さらには要衝に築造された背景についても考えてみたい。

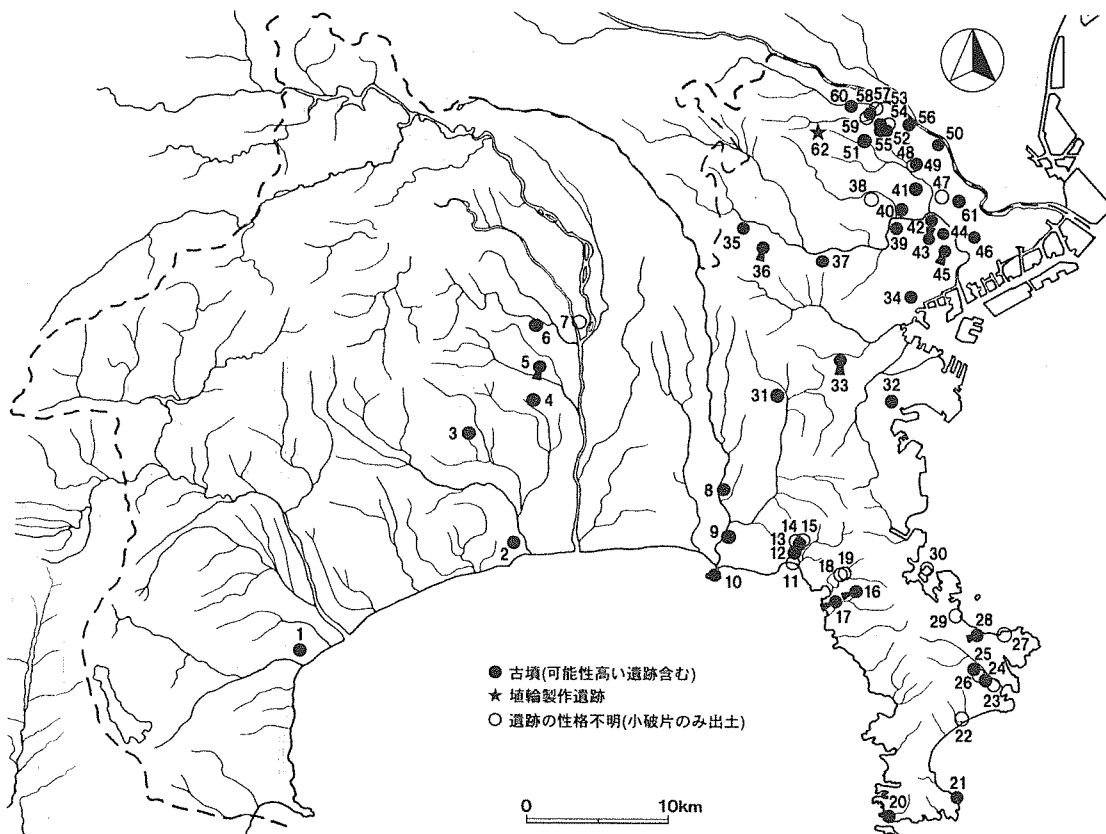
なお、論考は前後編とし、前編となる本稿では基礎作業として「外来系埴輪」を伴う各古墳の概要および樹立埴輪の特徴などからみた製作時期および工人集団について述べることとする。後編となる次稿では、これらをもとに作成した編年表と時期別の分布からみた神奈川県内の「外来系埴輪」樹立古墳の特徴と交通路との関係、さらにはその背景についても考えてみたい。

1 はじめに

神奈川県内では、現在までのところ 62 遺跡(註 1)から埴輪が出土または採集されている【図 1】。これは東京都内とともに、関東地方においては極端に少ない地域であることを示している。埴輪は古墳への樹立を目的として製作されていることから、埴輪の出土は古墳または製作遺跡の存在を示す可能性が高いと考えられている。しかし、神奈川県内の埴輪出土遺跡のなかには、54 久本横穴墓群(後藤 1996)・59 日向 5 号横穴墓(伊東 1981)のように尾根上の古墳から転落した埴輪片が直下の横穴墓の前庭部や羨道部から出土した可能性が極めて高い例や、鎌倉市内の 11 由比ガ浜 4-6-9 地点(大三輪 1994)・14 今小路西遺跡(社会福祉センター地点)(吉田 1993)・15 今小路西遺跡(御成小学校地点)(吉田 1990)のように、中世の大規模造成により古墳が破壊され、樹立されていた埴輪も破片となって広範囲に拡散した結果、複数の地点から検出されたと考えられる例などもある。このほか、27 中馬堀遺跡(稲村 1992)・18 池子遺跡群 No. 1-C 地点(梶淵 1996)・19 池子棧敷戸遺跡(若松 2000)のように古墳との関連が希薄と想定される海浜部の砂堆や沖積低地からの小破片出土例などもあることから、これらを除外すると神奈川県内での埴輪樹立古墳は 40 基程度ではないかと考えられる。

これらのなかで、4 小金塚古墳(久保 1985)・5 ホウダイ山古墳(厚木市 1998)・16 長柄桜山 1 号墳(佐藤 2012)・17 同 2 号墳など前期古墳の埴輪をみると、精巧では

あるものの地域色が強いことなどから、壺形埴輪・円筒埴輪ともに在地の土師器製作工人集団が製作に関与した可能性が高い。



- 1 八幡山遺跡 2 坊池古墳 3 登尾山古墳 4 小金塚古墳 5 ホウダイ山古墳 6 登山1号墳 7 稲荷山2号墳付近 8 チンガ塚古墳
 9 片瀬大源太遺跡 10 辺津宮境内遺跡 11 由比ヶ浜4-6-9地点遺跡 12 和田塚 13 采女塚古墳 14 今小路西遺跡(社会福祉)
 15 今小路西遺跡(御成小) 16 長柄桜山1号墳 17 長柄桜山2号墳 18 池子遺跡群No.1-C地点 19 池子棧敷戸遺跡 20 向ヶ崎古墳
 21 金掘塚古墳 22 長岡南遺跡 23 蓼原東遺跡 24 蓼原古墳 25 八幡神社4号墳 26 八幡神社遺跡群久里浜中学校地点
 27 中馬堀遺跡 28 大津1号墳 29 富士見町2丁目付近遺跡 30 吾妻崎遺跡 31 上矢部富士山古墳 32 室の木古墳
 33 瀬戸ヶ谷古墳 34 浦島塚古墳 35 北門1号墳 36 三保杉沢古墳 37 松葉古墳 38 新吉田町四ツ家2号横穴墓 39 大曾根古墳
 40 綱島古墳 41 日吉矢上古墳 42 駒岡飄軍山古墳 43 駒岡堂の前古墳 44 三ツ池付近 45 諏訪坂古墳 46 山伏塚古墳
 47 南加瀬横穴墓群 48 金堀2号横穴墓 49 金堀山古墳 50 上丸子古墳 51 西福寺古墳 52 久本山古墳 53 桃ノ園古墳
 54 久本横穴墓群 55 末長久保台遺跡 56 天神塚古墳 57 津田山久地5号横穴墓 58 日向古墳 59 日向5号横穴墓
 60 下作延稲荷塚古墳 61 塚越古墳 62 白井坂埴輪窯跡

【図1】神奈川県における埴輪出土遺跡分布図

また、神奈川県内で唯一確認された埴輪製作遺跡である 5 世紀後葉操業の 62 白井坂埴輪窯産の埴輪が、51 西福寺古墳(竹石 1983)に供給されていることが確認されている(坂詰 1965・浜田 2009)。その一方で、62 白井坂埴輪窯跡からは 51 西福寺古墳への供給埴輪以外の技法的特徴を有する埴輪も確認されている。埴輪樹立古墳数からみても埴輪製作が盛行しない地域であり、専門的工人集団は成立せず、技術的継承がおこなわれない単発的な操業であった可能性が高い。したがって、近隣地域で需要が生じた際、異なる技術体系を有する工人集団が 62 白井坂埴輪窯を単発的に再利用したとも考えられる。

これらを除く古墳または古墳の可能性が高い約 30 地点の現存する埴輪の胎土・製作技法、表現意匠などをみると、その多くに群馬県内または埼玉県内の埴輪との共通性がみられる。これらのことから、神奈川県内の古墳に樹立された中期以降の埴輪のほとんどが「外来系埴輪」であったと考えられる。

神奈川県内における「外来系埴輪」樹立古墳をみると、長期間かつ広範囲に分布しているものの、時期により分布状況が変化している。また、内陸部・沿岸部にかかわらず、交通路の要衝と推定される地点に多く築造されていることがわかる。したがって、これら「外来系埴輪」樹立古墳の築造時期・地点さらに埴輪の系譜を解明することができれば、古墳時代中期以降の東日本における東西交通と地域間交流の実態に迫ることも可能になると思われる。そのため、前編となる本稿ではまず、基礎作業として「外来系埴輪」樹立古墳の概要を述べるとともに、出土した埴輪について検討を加えてみたい。

2 神奈川県内における「外来系埴輪」の様相

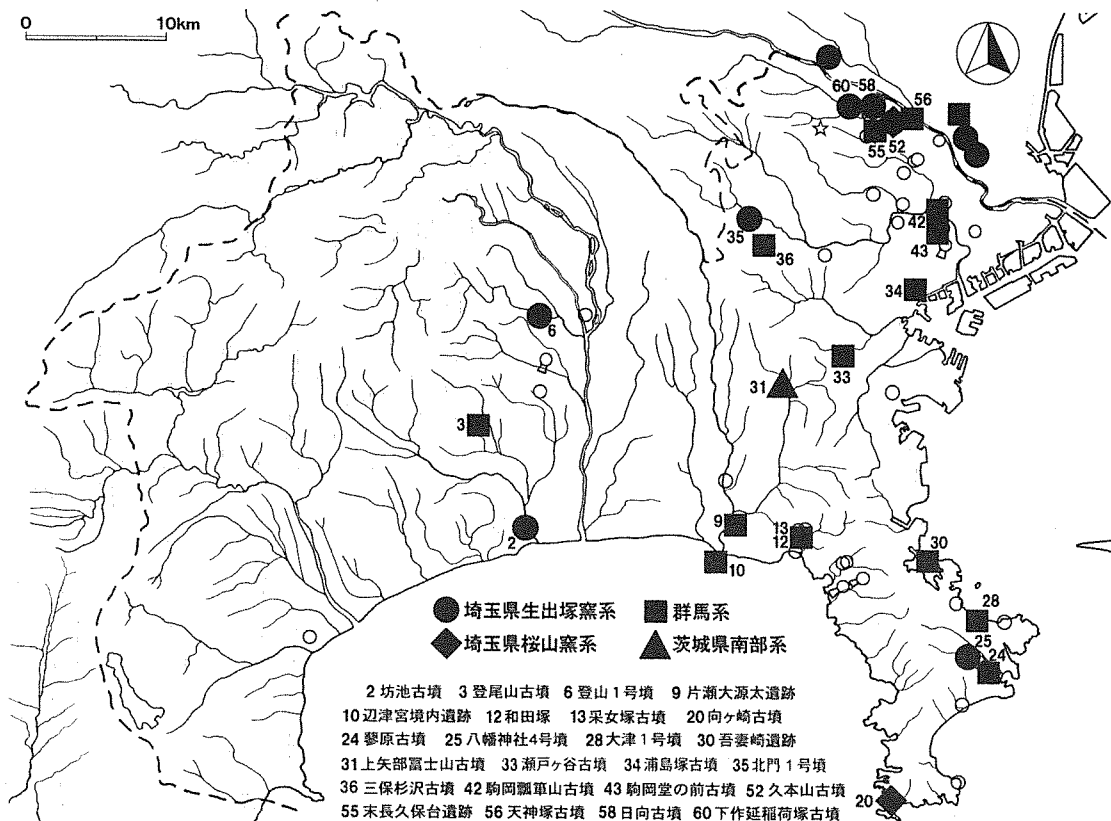
「外来系埴輪」とは、遠方の製作地から直接供給されるか、あるいは遠方の埴輪製作工人集団が移動し古墳近傍で製作した埴輪の総称である。したがって製作地にかかわらず、遠方の埴輪製作工人集団が全部あるいは一部の埴輪製作に直接関わっていることになる。

神奈川県内で現在までのところ「外来系埴輪」と認められるのは 24 遺跡の埴輪である【図 2】。現在では古墳の存在が確認できない遺跡も多いが、立地・出土状況などからみてすべて古墳に樹立されていた埴輪と考えられる。

以下、各古墳および埴輪の概要について記すが、埼玉県鴻巣市生出塚埴輪製作遺跡の工人集団によって製作されたと考えられる埴輪を生出塚窯系、同じく埼玉県東松山市桜山埴輪製作遺跡の工人集団によって製作されたと考えられる埴輪を桜山窯系とする。茨城県南部については、筑波山南麓に製作拠点を置く工人集団によって製作された可能性が高いが、製作地が特定されていないことから、茨城県南

部系とする。また、埼玉県の中なかでも児玉郡域については群馬県の影響を強く受けていることから、群馬系に含むものとする。

なお、築造時期に関して須恵器編年を使用する場合には、田辺昭三編年を基本とする(田辺 1981)。



【図2】 神奈川県における「外来系埴輪」分布図

2 坊地古墳【図3】中郡大磯町高麗(神奈川県 1979, 鈴木 1985a・b, 大磯町 2007)

高麗山南麓の緩斜面より埴輪片が採集されている。採集地点など詳細は不明であるが、周辺には猫塚・鞍掛石古墳群をはじめ多くの古墳群が分布している(大磯町 2007)ことから、採集時にはすでに削平されていた古墳と考えられる。

埴輪はすべて細片である。円筒埴輪の突帯はやや崩れた台形であるが成形・調整は比較的丁寧で、茶褐色を呈する一群と黄褐色を呈する一群がみられる。円筒埴輪のほか、全身立像と思われる人物埴輪も含まれている。茶褐色と黄褐色の一群

が共存することや、全身立像の存在、成形・調整等の特徴は 6 登山 1 号墳と共通していることから、6 登山 1 号墳と同時期かわずかに後出する生出塚窯系初期の 6 世紀初頭頃と考えられる。

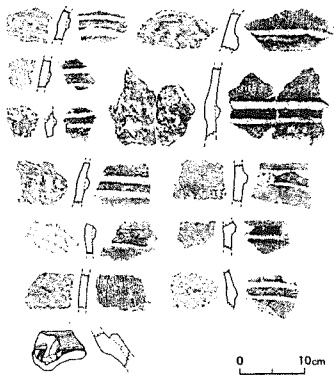
3 登尾山古墳 伊勢原市三ノ宮・登尾山(赤星 1970, 東海大学 1999)

伊勢原市の沖積地を眼下に望む独立丘から東方に延びる尾根の中程に立地する。墳形・規模ともに不明。主体部は南に開口する自然石積み両袖横穴式石室。? 製鏡 1, 水晶製切子玉 3, 石質不詳棗玉 3, 直刀, 鉄鏃, 刀子, 金銅製馬具一式, 銅製脚付蓋鏡 1, 須恵器高坏 1, 土師器坏 5 が出土しており, 須恵器高坏は TK43 型式新段階並行期と思われる。

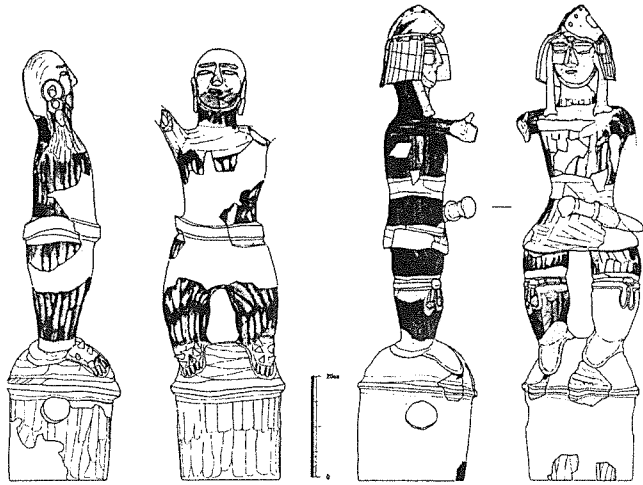
墳頂部に樹立されていたと思われる家形埴輪が出土している。切妻部分と屋根以下を別成形とする「分離成形」の入母屋造である。「分離成形」家は 6 世紀後葉以降の群馬県内に分布の中心があるが, 身屋にみられる横位突帯の存在は古相を呈する(稲村 2000)。群馬県内で盛行する両袖横穴式石室を主体部とすることや, 出土須恵器の様相などから, 6 世紀第 4 四半世紀初頭頃の群馬系埴輪と考えられる。

6 登山 1 号墳【図 3】厚木市飯山宇西登山(赤星 1967, 厚木市教委 1976, 今津 1992, 稲村 1997, 厚木市 1998)

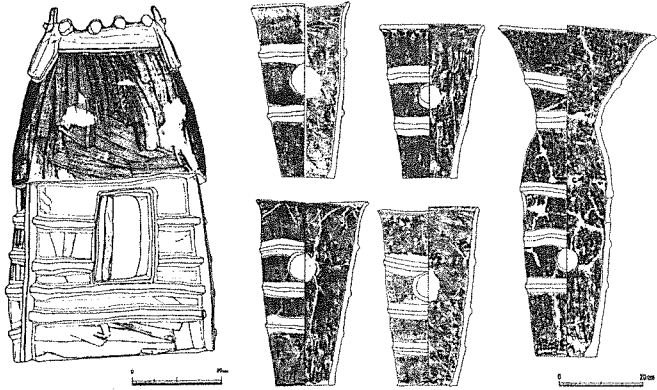
小鮎川を望む台地端付近に築造された直径約 20 m の円墳である。墳丘はすでに削平され, 埋葬施設は検出されなかった。周溝内に転落した状態で多数の埴輪(普通・朝顔形円筒, 家, 人物, 馬, 水鳥)が検出された。茶褐色系と黄褐色系の埴輪が共存する。黄褐色系の円筒埴輪は突帯断面「コ」字形の古相を呈する。一方茶褐色系の円筒埴輪には 2 条 3 段と 3 条 4 段があり, 3 条 4 段は生出塚埴輪製作遺跡内でも初期に位置づけられる第 1 号工房址出土品と酷似している(山崎 1994・稲村 1997)。また, 人物埴輪の腕成形では, 6 世紀第 2 四半世紀頃に生出塚埴輪製作遺跡で確立される「木芯中空成形」の祖型となる腕中空成形方法が採用されている(稲村 1999a・2003)。茶褐色系と黄褐色系埴輪の共存は埼玉県埼玉稲荷山古墳(柳田 1980)でも認められ, 古式の様相とみることができる。さらに, 生出塚第 1 号工房址出土品のほか埼玉二子山古墳(杉崎 1987)・鴻巣市新屋敷 4 号墳(田中 1994)など初期生出塚窯産円筒埴輪にみられる円筒埴輪外面における波形ヘラ記号も存在する(稲村 1997)ことなどから, 5 世紀に近い 6 世紀初頭頃に生出塚埴輪窯から直接供給された可能性が高い。しかし, 客体的とはいえ, 人物埴輪に多くみられる黄褐色系埴輪の製作地は不明である。



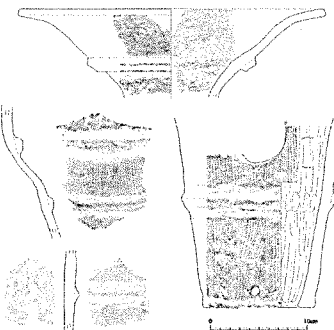
2 坊地古墳



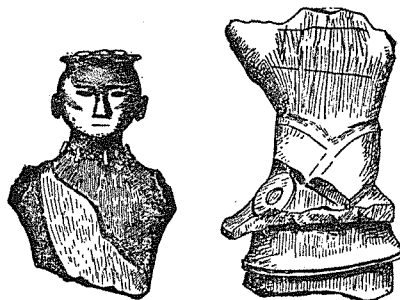
9 片瀬大源太遺跡



6 登山1号墳



10 辺津宮境内遺跡



13 采女塚古墳

【図3】各古墳出土の「外来系埴輪」(1)

9 片瀬大源太遺跡【図 3】藤沢市片瀬字大源太(寺田 1997)

境川下流左岸の低砂堆に立地する。横穴式石室を主体部とする古墳の跡と思われる直径約 11 × 12 m の 5 号溝状遺構の西側広範囲から埴輪片が出土している。溝の堆積層からは出土していないことから、異なる古墳に伴う埴輪と考えられる。周辺には正確な位置が不明ながら、鹿角装剣 1・直刀 1・鉄鎌 4・曲刃鎌 1 を出土したとされるすくも塚古墳(矢島 1934, 鎌倉市 1959, 藤沢市 1970)があり、あるいはこの古墳に伴う埴輪かもしれない。

検出された埴輪はすべて細片のため全形は不明であるが、口縁部は直立屈曲外反で、東日本では静岡県磐田市堂山古墳出土例に類似している(原 1995)。外面調整は丁寧で細かいB種横ハケであるが、突帯はやや粗雑。焼成は良好で、黒斑が認められないことから窖窯焼成の可能性が高い。畿内の製作技法を採用していることなどから、川西編年(川西 1978)のⅢ～Ⅳ期となる 5 世紀中葉頃と思われる。同時期の周辺地域で畿内の製作技法を採用しているのは群馬県内にはほぼ限られることから、群馬系の埴輪とみることができる。ただし、遠距離であり中間地点に類例は認められないが、堂山古墳の埴輪を製作した工人集団の直接関与も可能性として残る。

なお、胎土には雲母が含まれている。4 世紀末葉頃の築造とみられる伊勢原市小金塚古墳出土の在地的調整技法を採用した埴輪の胎土(久保 1985)も同様であることから、時間差はあるものの、同じ製作地域であった可能性もあろう。

10 辺津宮境内遺跡【図 3】藤沢市江ノ島(赤星 1960, 神奈川県 1979, 稲村 2014)

昭和 34(1959)年神社境内に付設されたエスカレーター(江の島エスカー)の工事中に出土。埴輪が複数種類存在することや、出土地点が本土に面した緩斜面中腹であることなどから、江の島内に古墳が築造されていた可能性が高い。

朝顔形を含む円筒のほか、形象の可能性のある破片も含まれている。下部が遺存する円筒埴輪をみると、器形、底径、突帯位置・断面形、スカシ孔位置・形状など群馬県高崎市保渡田八幡塚古墳東中島樹立 2 条 3 段円筒埴輪と共通する特徴を有している(若狭 2000)ことから、5 世紀末葉頃に群馬県西部から直接供給された可能性が高い。

12 和田塚 鎌倉市由井が浜 2 丁目付近(鎌倉市 1959, 東京国立博物館 1986)

砂堆上に立地している。赤星直忠が大正 15(1926)年に踏査した際には墳丘が遺存しており、北側石垣より埴輪(馬[鈴欠落の尻繫破片]・円筒破片 2 以上)を採集(鎌倉市 1959)とある。しかし、採集資料は現在確認できないばかりでなく、現存する和

田塚は和田義盛一族の供養塔を集めた平地の供養塚であり古墳ではないとされ、埴輪片も採集できない。したがって、赤星が埴輪を採集したとされる和田塚が現在の和田塚と同一かは確認できない。なお、東京国立博物館には和田塚出土とされる人物埴輪が昭和 2(1927)年に寄贈されている。二叉冠状の被り物をかぶった盾持人の左側頭部片と思われ、分銅形を呈する耳孔など初期人物埴輪の特徴がみられる(稲村 1999a)。

東京国立博物館に寄贈された人物埴輪が後述する 13 采女塚古墳と同じ初期人物埴輪の特徴を有すること、さらに采女塚古墳も同地域に存在したとされることなどから、埴輪採集の和田塚と采女塚古墳は同一墳である可能性も考えられる。

13 采女塚古墳【図 3】鎌倉市由井が浜 2 丁目付近(須藤 1896, 八木 1897, 坪井 1909, 赤星 1926, 鎌倉市 1959, 京都大学 1968)

正確な位置不明。砂堆上に立地しており、明治 20(1887)年山手から海浜院(海浜ホテル)裏に道(現在の大町辻から海岸に向かう)を建設中塚を崩した際に埴輪が出土したとされる(註 2)。多量の形象埴輪が出土していることなどから、詳細は不明ながら古墳と考えられる。

出土埴輪としては、女子・女子胴部・人物腕 2・馬鞍部残欠[京都大学蔵], 挂甲武人半身象[横浜国立大学蔵], 人物首・同胴腰部・同腕 2・馬頭部・同立髪・同鈴部・同脚 2・円筒 1・同底部大破片 2・他細片[今亡し]と報告されている(鎌倉市 1959)。

女子埴輪をみると、目頭が丸く目尻が切れ長となる関東地方では初期人物に多くみられる表現となっている。また、竹管刺突による耳孔・紐垂下形の耳飾り・粘土紐への勾玉粗間隔貼付などは群馬県を中心とする表現である(稲村 1999a)。また、馬形埴輪の鞍に表現されたヘラ連続刺突のみによる縫い取り表現も古相を示す。これらの特徴から、人物埴輪の初期となる 5 世紀末葉頃に群馬系工人によって製作されたものと考えられる。

20 向ヶ崎古墳(大椿寺裏古墳)【図 4】三浦市向ヶ崎町(浜田 1959, 赤星 1990, 稲村 2006)

城ヶ島の対岸となる台地の先端に位置する。昭和 33(1958)年城ヶ島大橋建設工事に伴う掘削作業中に埴輪出土。これに伴い浜田勘太がトレンチ調査を実施したが、埴輪は出土したものの、遺構は確認できなかったとされる(註 3)。円筒埴輪, 人物埴輪(正装男子半身像・女子半身像・武人頭部), 馬形埴輪が出土している。

普通円筒埴輪はやや細身で、スカシ孔は大形を維持するものの、1 段目の伸長化が明確にみられる。突帯の断面は崩れ突出度は低いが、生出土塚系に特徴的な

扁平突帯ではない。これらのことから、6世紀第Ⅲ四半世紀頃に位置づけられよう。人物埴輪の目と口は横長に穿孔されている。手は親指以外の4指が一体となるミトン形表現で、肩から腕にかけて外面に板オサエ調整がみられる。さらに、上着腰部はわずかに膨らみ裾の突出は小さく、胴長に成形されている。これら人物の特徴は桜山窯系の埴輪と共通する(江原 2004)ことから、桜山窯系の工人集団によって製作された可能性が高い。しかし、桜山窯など比企地方に特徴的とされる胎土への白色針状物質の混入が確認できないことから、桜山窯産かは不明である。

24 蓼原古墳【図4】横須賀市神明町(赤星 1938, 大塚 1987, 稲村 1995)

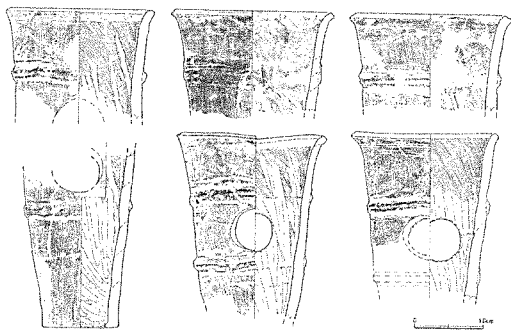
古久里浜の入り江に面した低砂堆上に立地する。昭和 12(1937)年赤星直忠によって一部調査され、その後昭和 53(1978)年にほぼ全面が調査された。全長約 28 m を測る帆立貝形前方後円墳で、墳丘はすでに流出し埋葬施設は不明である。埴輪は墳丘から転落した状況で周溝内各所から出土している。

2条3段の普通円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪に加え、家形、人物、馬形埴輪などの形象埴輪も多く出土している。円筒埴輪は1段目がわずかに伸長化しているが、3段目の幅も広いものが多い。突帯断面形は台形を維持したものもみられ、スカシ孔は大きく上辺が直線となるものもみられる。一部に板押圧の底部調整がみられる。これらの特徴は太田市塚廻り古墳群(石塚 1980)など群馬県東部の6世紀前葉の円筒埴輪と共通している。また、弾琴男子椅座像埴輪にみられる垂下帯付美豆良、首飾り、連続三角文装飾付帯、椅座弾琴などはすべて東部を中心とする群馬系人物の特徴でもある(稲村 1999a)ことから、6世紀第Ⅱ四半世紀前半頃に群馬県東部の工人集団によって製作された埴輪と考えられる。

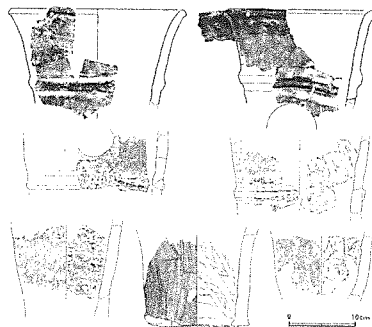
25 八幡神社4号墳【図4】横須賀市久里浜2(中三川 1997・2006)

24 蓼原古墳の北西約 400 m の低砂堆上に立地する。古墳は確認されていないが、3号墳の東方に埴輪片が広範囲で多数採集・出土する地点があることから古墳の存在が想定され、4号墳としている。

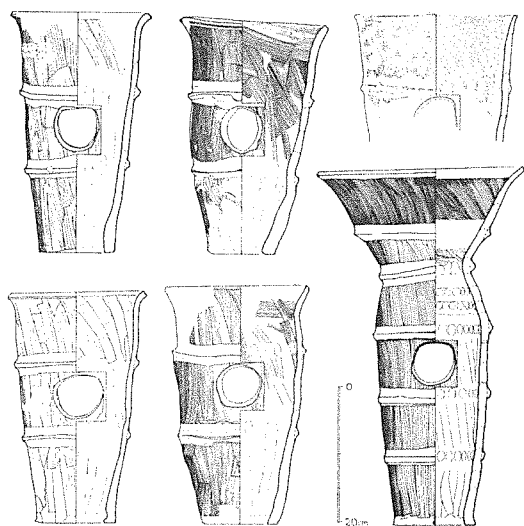
円筒埴輪片のほか、人物・馬などの形象埴輪片も確認できる。赤褐色を呈し、焼成が極めて良好であることから、生出塚窯産の可能性が高い。すべて破片のため詳細は不明であるが、細身の器形で1段目は伸長化している。ただし板押圧などの底部調整は認められない。突帯断面形は崩れた台形が主体である。これらの特徴から生出塚Ⅱ期(須恵器編年 MT15 ~ TK10 型式並行期)に属するとみられるが、Ⅱ期最古段階の新屋敷 15 号墳との共通点も認められることから、6世紀中葉前半頃の生出塚産と考えられる(昼間 1998, 山崎 2000・2006)。



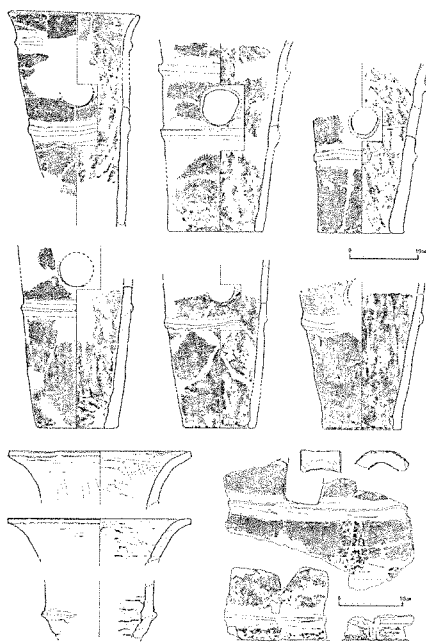
20 向ヶ崎古墳



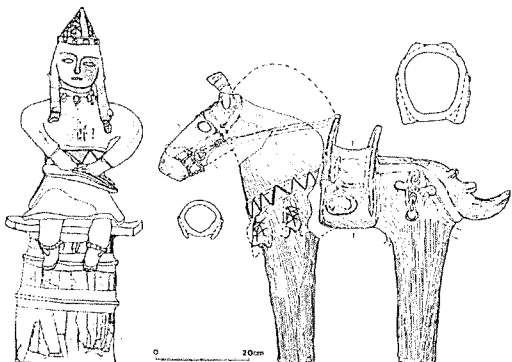
25 八幡神社4号墳



24 蓼原古墳



28 大津1号墳



30 吾妻崎遺跡

【図4】各古墳出土の「外来系埴輪」(2)

28 大津 1 号墳【図 4】横須賀市大津町 3 丁目(稲村 2011・2012)

東京湾を望む尾根先端に築造された全長約 23 m の帆立貝形前方後円墳である。主体部は自然(磯)石積みの右片袖横穴式石室とみられる。後円部墳頂から家形埴輪、くびれ部から馬形埴輪片、墳丘各所から円筒埴輪が出土している。また、石室の前庭部からは須恵器提瓶が検出されている。石室は未調査。

家形埴輪を含む円筒埴輪の一部には胎土に白色針状物質を含むものがあり、藤岡市本郷埴輪窯など群馬県西部での製作と考えられる。また、円筒埴輪には複数種類が確認されているが、いずれも群馬県佐波郡玉村町小泉大塚越 3 号墳(宮塚 1993)や藤岡市平井地区 1 号墳(志村 1993)、群馬県から供給されたと考えられる埼玉県行田市酒巻 15・21 号墳出土円筒埴輪(中島 1989・1994)等と共通した特徴を有する。したがって、複数の製作地からの供給であった可能性が高いが、すべて群馬系ということとなる。時期については、前庭部から出土した須恵器、共通した特徴の埴輪を出土した古墳いずれもが須恵器編年 TK43 型式並行期を中心としている。

31 上矢部富士山古墳 横浜市戸塚区上矢部町(佐藤 1991)

柏尾川上流の丘陵端部に築造された直径約 25.5 m の円墳である。墳丘はすでに削平されており、埋葬施設は不明。碧玉製管玉 1 が出土している。

周溝内より多量の埴輪が出土しており、朝顔を含む円筒埴輪、盾持人、椅座男子含む人物、馬、鳥などが確認されている。

盾持人における冠帽と耳、馬の渦巻き状辻金具表現など特異な形象埴輪表現の共通性から、千葉県成田市竜角寺 101 号墳(安藤 1988)と同系の埴輪工人による製作の可能性が高い。竜角寺 101 号墳の埴輪は円筒のほか、女子髻の特殊な成形方法などから千葉県成田市南羽鳥高野遺跡 1 号墳(宇田 1996)や茨城県取手市市之代 3 号墳(諸星 1978)などと同一の工人集団によって製作された可能性が高いことが指摘されている(稲村 1999a・石橋 2004)。製作地は不明であるが、一部の胎土に雲母が含まれていることから、筑波山南麓から霞ヶ浦南部にかけての地で製作された可能性が高い。これらの埴輪を「茨城県南部系」とすると、突帯間隔がほぼ均等で大形のスカシ孔などから古式の様相を呈するが、茨城県中部の「小幡北山系」(稲村 1999a)の影響を受けたと思われる朝顔形円筒埴輪肩部スカシ孔の存在から、6 世紀中葉の古段階に位置づけられる。本墳の円筒埴輪を比較すると相対的に 1 段目が伸長化傾向にあり、スカシ孔も小形化していることから、わずかに後出する可能性がある。さらに、朝顔形円筒埴輪肩部スカシ孔や胎土の雲母が確認できていないなど異なる特徴もみられる。このような差異は認められるものの、「茨城県南部系」埴輪工人によって製作されたと考えられる。

33 瀬戸ヶ谷古墳 横浜市保土ヶ谷区瀬戸ヶ谷町(三木 1955, 石野 1955, 神奈川県 1979, 東京国立博物館 1986)

帷子川の支流, 今井川を望む丘陵地帯の尾根先端に築造された全長約 41 m の前方後円墳である。昭和 24(1949)年に実施された東京国立博物館と神奈川県教育委員会とによる合同調査時には, 埴輪列が三重に巡っていたとされる。後円部墳頂の盗掘坑からは家形埴輪が, 西側くびれ部にかけて形象埴輪が出土している。盗掘坑内に石材が確認されていないことから, 非石室系の埋葬施設であった可能性が高い。

埴輪は朝顔形を含む円筒埴輪のほか, 形象埴輪として正装男子・女子・馬・分離成形家・盾・靱・太刀・帽子などが確認されている。正装男子における立体的襟表現は 6 世紀後半代の群馬県内で(稲村 1999a), 分離成形家や多様な器財埴輪も 6 世紀後葉以降に群馬県内で盛行する。形象埴輪全体が高度な技術体系で製作された精巧品であることから, 群馬系工人による製作と考えられる。最下段突帯低位置化の 4 条 5 段普通円筒埴輪の共存もこれを裏付けよう(松本 1981)。時期については, 横穴式石室導入以前と考えれば, 須恵器編年 TK43 型式並行期であろうか。

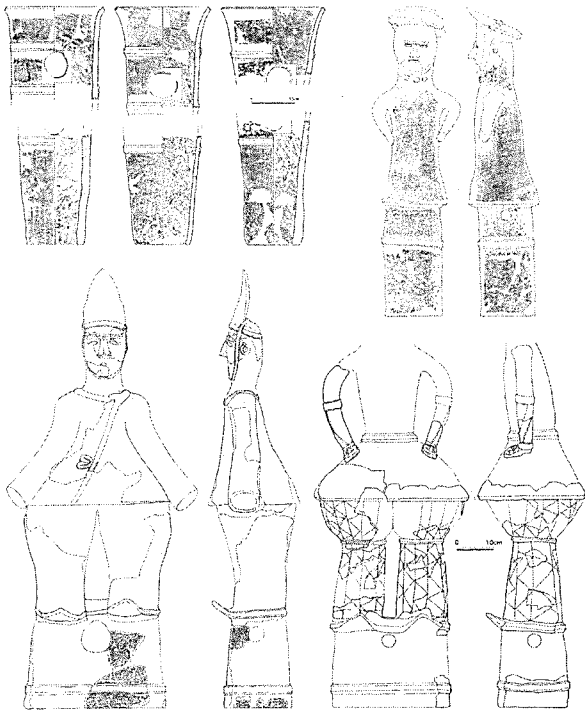
34 浦島塚古墳 横浜市神奈川区七島町と白幡東町との境(石野 1958, 柳沼 2013・2014)

詳細不明。出土地点とされる地域は横浜港を望む台地上で, 先端に舌状地形がみられる。すでに頂部は削平され宅地となっているが, 地形的にみても古墳が築造されていた可能性が高い。

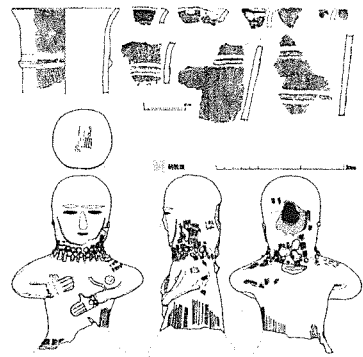
女子頭部の出土が伝えられている。頭頂部のみをわずかに閉塞するように鬘を水平に貼付する成形方法や, 耳孔・耳朵, 首飾り表現などは, 塚廻り 4 号墳をはじめ群馬県東部から小山市飯塚 31 号墳など栃木県南部の 6 世紀中葉頃の古墳に多くみられる(稲村 1999a)。また, 下弦レンズ形目・口も同地域に濃密に分布している。栃木県南部の埴輪が群馬県東部からの直接供給あるいは強い影響下で成立したことを考えると, 本墳出土女子埴輪も 6 世紀中葉頃に群馬県東部から直接供給された可能性が高い。

35 北門 1 号墳【図 5】横浜市緑区十日市場町(坂本 1980, 緑区 1986, 鈴木 1989, 滝澤 2007)

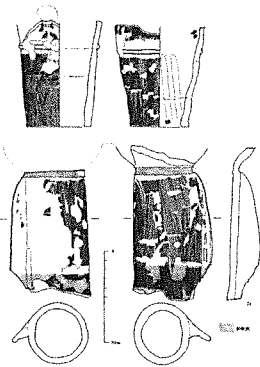
鶴見川の支流である恩田川を望む舌状台地端部に築造された, 直径約 16 m の円墳である。切石積みの無袖横穴式石室からは耳鐙・直刀・刀子・鉄鏃・両頭金具, 周溝からは須恵器平瓶も出土している。



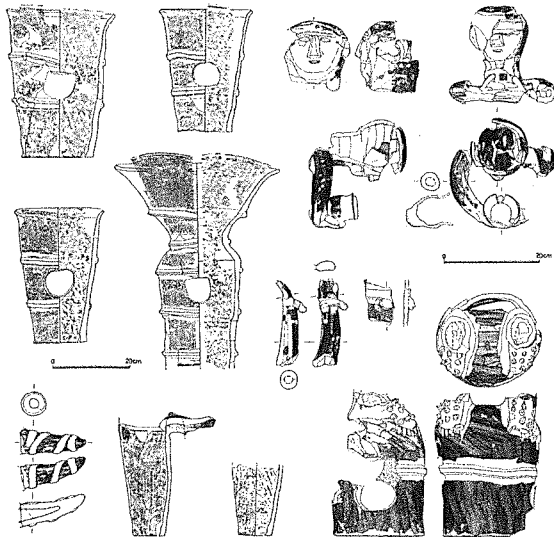
35 北門1号墳



52 久本山古墳



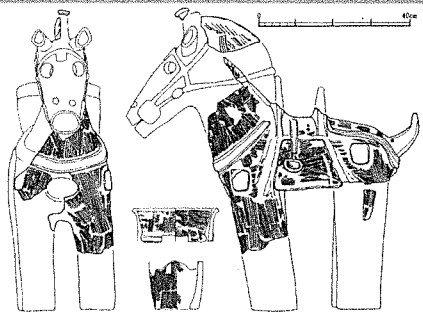
56 天神塚古墳



55 末長久保台遺跡



58 日向古墳(人物頭部は日向5号横穴墓)



60 下作延稲荷塚古墳

【図5】各古墳出土の「外来系埴輪」(3)

円筒埴輪のほか、形象埴輪としては正装男子全身立像・(武人?)男子全身立像・男子半身像・女子半身像・馬・盾・さしば・太刀などが確認されている。いずれも典型的な生出塚窯系(稲村 1999a)であり、赤褐色の胎土などから直接供給と考えられている。また、円筒埴輪における極端な1段目の伸長化と突出度の小さい扁平M字状突帯、千葉県山倉1号墳(櫻井 2004)と同形の三角巾形冠帽を被る筒袖男子、終末期に登場する器財埴輪群などの存在から、生出塚IV期となる6世紀末葉頃の築造であろう。

42 駒岡瓢箪山古墳 横浜市鶴見区駒岡町岩瀬(大野 1909・1926, 和田 1910, 東京国立博物館 1986, 柳沼 2012・2014)

鶴見川を望む丘陵先端に築造された円墳とされる。埋葬施設は不明。円筒埴輪のほか、正装男子・馬・鞍などの形象埴輪も出土している。正装男子上半身にみられる巻き付け形三角巾形冠帽、円錐形下げ美豆良は6世紀後葉頃の群馬県内を中心に分布する。また、太田市オクマン山古墳出土鷹を左手に載せる正装男子全身立像(群馬県立歴史博物館 1979)を代表例とした上下2段紐による帯は群馬県内のみ、紐貼付による籠手表現は群馬県東部に特徴的な表現である(稲村 1999a)。これらを考えあわせると、6世紀第Ⅲ四半世紀頃に群馬県東部の工人によって製作された可能性が高い。

43 駒岡堂の前古墳 横浜市鶴見区駒岡町堂の前(池谷 1969, 横浜市港北ニュータウン 1986, 柳沼 2013・2014)

駒岡瓢箪山古墳の南側、同一丘陵上に築造された前方後円墳で、前方部の一部が遺存している。埋葬施設は不明。円筒埴輪のほか、家・鞍・太刀・鉾・星形双脚輪状文などの形象埴輪も出土している。星形双脚輪状文形埴輪は西日本にみられる横向きの双脚ではなく、群馬県内で独自に変化した縦向きの双脚表現であることから(稲村 1999b)、群馬系工人により製作されたものと考えられる。表現には粗雑化・形骸化傾向が認められることから、終末期の6世紀末葉頃に位置づけられよう。また、胎土には角閃石安山岩が混入していることから、群馬県内で製作し直接供給されたと考えられる(中里 2000)。

52 久本山古墳【図5】川崎市高津区久本(浜田 1996)

舌状台地の先端に位置する。かつては円筒埴輪が巡っていたとされるが、現在では詳細不明。埴輪はすべて採集資料で、円筒・女子上半身・腕・馬尾などが確認できる。

円筒埴輪には生出塚窯系と非生出塚窯系が共存している。生出塚窯系は突帯の

扁平度などから、生出塚Ⅲ期(須恵器編年 MT85 ~ TK43 型式並行期)以降と考えられる。

女子の首飾りは群馬県塚廻り 3 号墳に類例が認められるだけである。また、二連首飾りと手首玉巻のセットは群馬県における上位女子の表現でもある。ただし、耳飾りにおける横位三段紐と環状紐貼付の組み合わせは、桜山窯系を中心とした埼玉県に特徴的な表現となっている。首飾り、耳飾りともに 6 世紀中葉以前が盛行期であることから(稲村 1999a)、円筒埴輪の様相とあわせると生出塚Ⅲ期の新段階、須恵器編年 TK43 型式並行期頃に群馬県からの強い影響を受けて製作された桜山窯系の女子埴輪の可能性がある。このように考えると、埼玉県内の桜山窯系と生出塚窯系という複数の製作地から供給されている可能性が考えられよう。

55 末長久保台遺跡【図 5】川崎市高津区末長(鈴木 1989)

多摩川を望む丘陵上に立地する。出土した埴輪は多く、朝顔形を含む円筒のほか力士と思われる人物全身立像・曲刃鎌を腰に差す人物半身像・壺を捧げる女子や、馬などの形象もみられる。古式の甲類と新式の乙類とに分類されており、5 世紀末葉から 6 世紀前半頃にかけて製作されたとみられている。異なる古墳に伴うものか、異系譜の埴輪が同一墳に供給されたのかは不明である。その後同一地域で古墳の一部が調査され周溝内より類似した特徴を有する埴輪群が出土している。検出された円筒埴輪の一部の胎土に結晶片岩が含まれていることが確認できたことから、藤岡市など群馬県西部で製作されたと考えられる(前原 1995)。

56 天神塚古墳【図 5】川崎市高津区諏訪(伊東 1968, 佐藤・伊東 1988, 浜田 1991)

多摩川に面した沖積微高地に築造されている。墳形・規模は不明であるが、現状で直径約 18 m の墳丘が確認されている。主体部は切石積み無袖横穴式石室で TK43 ~ 209 型式並行期の須恵器平瓶・高坏などが出土している。

円筒埴輪のほか、形象埴輪として正装男子全身立像脚部が確認される。人物脚部には鰭状の突出表現が認められるが、これは 6 世紀後半代に入り群馬県内で出現し、その後影響を強く受けた茨城県、さらにその影響下で出現した千葉県山武郡周辺で盛行している(稲村 1999a)(註 4)。ただし、本墳出土にみる巻き付け形で鰭の上端が孤形を呈するのは群馬県太田市四ツ塚出土品(群馬県立歴史博物館 1979・東京国立博物館 1983)や須恵器編年 TK43 型式並行期と考えられる高崎市綿貫観音山古墳(梅澤 1998)など群馬県内に限られる。また、円筒埴輪も、TK43 ~ 209 型式並行期に位置づけられる伊勢崎市波志江今宮遺跡 7 号墳(神谷 1995)などと類似した特徴を有することから、この時期群馬県内の工人によって製作された可能性が高い。

58 日向古墳【図 5】川崎市高津区下作延(伊東 1981, 浜田 1996)

丘陵先端頂部に築造された直径約 25 m の円墳である。墳丘の遺存状態は良く全面調査により墳丘裾から埴輪列が検出されたものの、墳丘内部から埋葬施設は確認されなかった。未報告。

埴輪は円筒のほか、人物・馬などの形象も出土している。図 5 に掲載した男子頭部残欠は日向 5 号横穴墓からの出土であるが、丘陵直下斜面に位置していることから、本墳より転落したかあるいは墓前祭祀に再利用したものと思われる。人物頭部には生出塚 3 号墳例(山崎 1981)と同じ生出塚Ⅲ期以降に定形化すると考えられる特徴的な顔面成形法がみられる(稲村 1999a)。また、細身で極端に伸長化した 1 段目と突出度がほとんどない扁平 M 字状突帯の円筒埴輪は生出塚Ⅳ期に属すると考えられることから、6 世紀末葉頃に生出塚窯から直接供給された可能性が高い。

60 下作延稲荷塚古墳【図 5】川崎市高津区下作延(浜田 1991・1996)

舌状台地端部に築造された直径約 27 m の円墳である。埴輪は円筒・馬が確認されている。35 北門 1 号墳と同様焼成が良好な赤褐色を呈するが、胎土分析の結果では 58 日向古墳とともに生出塚窯産の可能性が高いとされる(三辻 1989, 浜田 1996)。円筒埴輪の底径は小さく突出度がほとんどない扁平 M 字状突帯であることから、生出塚でも終末期となるⅣ期となろう。一方、馬形埴輪については武蔵地域の馬形埴輪についての比較検討から、6 世紀第Ⅲ四半世紀頃と考えられている(井上 1996, 浜田 1996)。したがって、6 世紀第Ⅲ～Ⅳ四半世紀にかけて生出塚窯で製作されたと考えられる。

このほか、横須賀市箱崎町の半島先端に位置する 30 吾妻崎遺跡【図 4】(横須賀市人文博物館 1987, 稲村繁 2001)出土の家形埴輪身屋下端部の破片については、胎土に角閃石安山岩を含む可能性がある。角閃石安山岩であるとすれば、43 駒岡堂の前古墳出土埴輪同様 6 世紀後半代に群馬県内で製作されたことになろう。また、横浜市緑区三保町の丘陵頂部に築造された切石積み無袖横穴式石室を主体部とする 36 三保杉沢古墳(四本 1979)については、出土土器などから須恵器編年 TK43～TK209 型式並行期の 6 世紀末葉頃の築造と考えられるが、1 段目が伸長化せず突帯断面形も下端が崩れた M 字形を呈する円筒埴輪の特徴などから、非生出塚窯系とみられる。

註

(1) 稲村繁 1996 を一部修正

※ 最新の集成として本稿では、詳細が不明な厚木市登山西古墳・寒川町大神塚古墳・平塚市平

塚古墳・横浜市日吉台 3 号墳・川崎市加瀬台 1 号墳・同市了源寺古墳、および埴輪と断定できない海老名市秋葉山 3 号墳・同市瓢箪塚古墳・横浜市上の山 4 号墳を削除し、新たに小田原市八幡山遺跡・厚木市ホウダイ山古墳・藤沢市大源太遺跡・逗子市池子遺跡群No. 1-C 地点・同市池子枝敷戸遺跡・逗子市/葉山町長柄桜山 1 号墳・同 2 号墳・横須賀市大津 1 号墳・川崎市塚越古墳を追加し、横浜市大曾根の 2 地点を同一古墳とし、総計 62 遺跡とした。また、古墳名のうち八幡神社遺跡群八幡神社地点を八幡神社 4 号墳、朕ヶ塚古墳をチンガ塚古墳、大蓮寺裏を久本山古墳、久本末周知古墳を桃ノ園古墳と修正した。

(2) 坪井 1909 には、古く「采女塚」と称し現在は全く削平とある。また、付近には和田塚・沢山塚(開墾により削平)等ありとも記載されており、古墳群を形成していた可能性が考えられる。

(3) 赤星 1990 では遺構を確認したとあるが、詳細は不明である。

(4) 生出塚埴輪製作遺跡でも鰭表現の全身立像脚部が出土しているとされる(大谷徹 2001)。ただし、終末期段階で群馬系からの強い影響を受ける生出塚埴輪製作工人集団であっても、脚部の鰭表現は主体とはならない。

引用・参考文献

- 須藤求馬 1896「鎌倉発見埴輪図説」『東京人類学会雑誌』12-127
- 八木柴三郎 1897「鎌倉采女塚の遺物」『考古界』1-10
- 坪井正五郎 1909「鎌倉にて発見されたる埴輪について」『鎌倉文明史論』三省堂
- 大野延太郎 1909「武蔵国駒岡新発見の横穴」『考古界』7-8
- 和田軍一 1910「武蔵国駒岡の古墳発掘」『考古界』8-6
- 大野延太郎 1926「武蔵国駒岡の横穴に就いて」『武蔵野』8-3
- 赤星直忠 1926「鎌倉だより(2)(采女塚埴輪・長谷横穴)」『考古学雑誌』16-9
- 矢島栄一 1934「神奈川県鎌倉郡片瀬川左岸の遺跡及び遺物に就いて」『考古学雑誌』24-8
- 赤星直忠 1938「横須賀市における形象埴輪の出土について」『考古学雑誌』28-6
- 石野瑛 1958「横浜市神奈川区浦島塚古墳」『日本考古学年報』7
- 鎌倉市 1959『鎌倉市史』考古編
- 浜田勘太 1959『向ヶ崎古墳の埴輪について』(謄写刷)
- 赤星直忠 1960「考古調査略報」『神奈川県文化財調査報告』26
- 坂詰秀一 1965「神奈川県白井坂埴輪窯跡」『武蔵野』44-2.3
- 赤星直忠 1967「厚木市登山古墳調査概報」『厚木市文化財調査報告』8
- 京都大学文学部 1968『京都大学文学部考古学資料目録』2 日本歴史時代
- 伊東秀吉 1968「川崎市の古墳(2)」『川崎市文化財調査集録』4
- 池谷健治ほか 1969『駒岡及びその周辺の上代遺跡』
- 赤星直忠 1970「登尾山古墳」『神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告』1
- 藤沢市 1970『藤沢市史』第1巻 資料編
- 厚木市教育委員会 1976『埋蔵文化財分布状況調査』厚木市文化財調査報告書18
- 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2
- 諸星政得ほか 1978『市之代古墳群3号墳調査報告』
- 神奈川県 1979『神奈川県史 資料編 20 考古資料』
- 四本和行ほか 1979『三保杉沢遺跡群』日本窯業史研究所報告9
- 群馬県立歴史博物館 1979『開館記念展 群馬の埴輪』
- 柳田敏司ほか 1980『埼玉稲荷山古墳』
- 石塚久則ほか 1980『塚廻り古墳群』群馬県教育委員会
- 坂本彰 1980「北門古墳群をめぐって」『都筑文化』1
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- 松本浩一ほか 1981『金冠塚(山王二子山)古墳調査概報』前橋市教育委員会
- 伊東秀吉・大坪宣雄 1981「川崎市下作延日向横穴墓群の調査」『第3回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
- 山崎武ほか 1981『生出塚遺跡』鴻巣市遺跡調査会報告書2
- 竹石健二 1983『県史跡西福寺古墳一保存整備報告書一』
- 東京国立博物館 1983『東京国立博物館図版目録 古墳遺物篇(関東Ⅱ)』
- 鈴木一男 1985a『大磯の遺跡』大磯町教育委

員会

鈴木一男 1985b『猫塚・鞍掛石古墳群第3号墳の確認調査』大磯町埋蔵文化財発掘調査小報7
久保哲三ほか 1985『伊勢原市小金塚古墳』東京国立博物館 1986『東京国立博物館図版目録 古墳遺物篇(関東Ⅲ)』
緑区史編集委員会 1986『緑区史』資料編2
横浜市港北ニュータウン埋蔵文化財調査団編 1986『古代のよこはま』
杉崎茂樹ほか 1987『二子山古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書5
横須賀市人文博物館 1987『考古資料図録』Ⅱ
大塚眞弘ほか 1987『蓼原』横須賀市文化財調査報告書13-1
安藤鴻基ほか 1988『千葉県成田市所在竜角寺古墳群第101号古墳発掘調査報告書』佐藤善一・伊東秀吉 1988『川崎市内の高塚古墳について』『川崎市文化財調査集録』24
中島洋一 1989『酒巻15号墳』行田市文化財調査報告書21
鈴木重信 1989『川崎市高津区末長久保台出土の埴輪』『川崎市文化財調査集録』25
三辻利一 1989『付章 網島, および, その周辺の古墳出土須恵器, 埴輪の蛍光X線分析』『網島古墳』横浜市埋蔵文化財調査委員会
吉田章一郎 1990『今小路西遺跡(御成小学校内)発掘調査報告書』
赤星直忠 1990『故 浜田先生を悼んで』『横須賀考古学会年報』28(浜田勘太先生追悼号)
佐藤安平ほか 1991『上矢部町富士山古墳調査概要』
浜田晋介 1991『川崎の埴輪』『川崎市市民ミュージアム紀要』4
稲村繁 1992『中馬堀遺跡』横須賀市埋蔵文化財調査報告書1
今津節生ほか 1992『登山1号墳出土遺物調査報告書』厚木市教育委員会
吉田章一郎 1993『今小路西遺跡発掘調査報告書 社会福祉センター用地・御成町625-2 地点』
宮塚義人ほか 1993『小泉大塚越遺跡』玉村町埋蔵文化財調査報告書10
志村哲 1993『平井地区1号古墳 - 範囲確認調査報告書Ⅷ - 』藤岡市教育委員会
大三輪龍彦 1994『由比ヶ浜4-6-9地点発掘調査報告書』
山崎武 1994『鴻巣市遺跡群Ⅲ 生出塚遺跡(D・E地点)』鴻巣市文化財調査報告3
田中正夫 1994『新屋敷遺跡 - A区 - 』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書140
中島洋一ほか 1994『酒巻21号墳(2次)・白山愛宕山古墳(1, 2次)・白山2号墳』行田市文化

財調査報告書30

原秀三郎ほか 1995『遠江 堂山古墳』磐田市教育委員会
前原豊 1995『Ⅵ成果と問題点』『中二子古墳』前橋市教育委員会
稲村繁 1995『三浦半島の埴輪(Ⅱ) - 蓼原古墳出土の馬形埴輪 - 』『横須賀市博物館研究報告(人文科学)』40
神谷佳明ほか 1995『波志江今宮遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告181
稲村繁 1996『神奈川県 of 埴輪(Ⅰ) - 埴輪出土の古墳・遺跡について - 』『横須賀市博物館研究報告(人文科学)』41
榊淵規彰ほか 1996『池子遺跡群Ⅲ No.1-C地点米軍家族住宅建設にともなう調査 - 』かながわ考古学財団調査報告11
後藤喜八郎 1996『川崎市高津区久本横穴墓群発掘調査報告書』
宇田敦司 1996『南羽鳥遺跡群Ⅰ』(財)印旛郡市文化財センター発掘調査報告書112
浜田晋介 1996『川崎の埴輪(Ⅱ)』『川崎市市民ミュージアム紀要』9
井上裕一 1996『武蔵の馬形埴輪』『埴輪研究会誌』2
稲村繁ほか 1997『厚木市登山1号墳出土埴輪修理報告書』厚木市教育委員会
中三川昇ほか 1997『八幡神社遺跡Ⅱ』横須賀市文化財調査報告書31
厚木市秘書部市史編さん室編 1998『厚木市史』古代資料編2
昼間孝志ほか 1998『新屋敷遺跡D区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書194
梅澤重昭ほか 1998『綿貫観音山古墳Ⅰ』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告242
東海大学校地内遺跡調査団 1999『相模国のはじまり - 相模地方の豪族と相模国の成立 - 』第10回足もとに眠る歴史 東海大学校地内遺跡調査団創設10周年
稲村繁 1999a『人物埴輪の研究』同成社
稲村繁 1999b『器財埴輪論』『博古研究』18
若松美智子ほか 2000『池子浅敷戸遺跡』東国歴史考古学研究所調査研究報告26
稲村繁 2000『家形埴輪論』『埴輪研究会誌』4
中里正憲 2000『角閃石安山岩を混入する埴輪について - 小泉大塚越3号墳の埴輪を中心に - 』『埴輪研究会誌』4
山崎武 2000『埼玉県の円筒埴輪の編年について』『埴輪研究会誌』4
若狭徹ほか 2000『保渡田八幡塚古墳』群馬町埋蔵文化財調査報告57
大谷徹 2001『埼玉県内における全身立像人物埴輪の様相 - 日高市高萩公民館旧蔵の人物埴輪』

- 輪の紹介ー』『埴輪研究会誌』5
- 稲村繁 2001「横須賀市吾妻崎採集の家形埴輪」
『埴輪研究会誌』5
- 稲村繁 2003「沼津長塚古墳採集の人物埴輪ー
静岡県東部における関東系埴輪についてー」
『埴輪研究会誌』7
- 江原昌俊 2004「東松山市桜山埴輪窯と製品の
供給先」『埴輪研究会誌』8
- 石橋充 2004「筑波山系の埴輪」の分布につい
て」『埴輪研究会誌』8
- 櫻井敦史ほか 2004『市原市山倉古墳群』(財)
市原市文化財センター調査報告書85
- 稲村繁 2006「神奈川県三浦市向ヶ崎古墳出土
の埴輪(1)」『埴輪研究会誌』10
- 中三川昇 2006「2.八幡社遺跡群(No.248)」『埋
蔵文化財発掘調査概報集XIV』横須賀市文化
財調査報告書42
- 山崎武 2006『鴻巣市遺跡群12 生出塚遺跡(W
地点)』鴻巣市文化財調査報告13
- 大磯町 2007『大磯町史 10 別編 考古』
- 滝澤友子ほか 2007『北門古墳群I』
- 浜田晋介ほか 2009『白井坂埴輪窯跡』川崎市
市民ミュージアム考古学叢書6
- 稲村繁 2011「大津古墳群の調査1(古墳遺構
編)」『市史研究横須賀』10
- 佐藤仁彦・山口正憲 2012『国指定史跡長柄桜
山古墳群第1号墳発掘調査報告書』逗子市・葉
山町教育委員会
- 稲村繁 2012「大津古墳群の調査2(1号墳の出土
遺物)」『市史研究横須賀』11
- 柳沼千枝 2012「埴輪の生産体制と地域社会の
研究」『横浜市歴史博物館調査研究報告』8
- 柳沼千枝 2013「埴輪の生産体制と地域社会の
研究」『横浜市歴史博物館調査研究報告』9
- 柳沼千枝 2014「埴輪の生産体制と地域社会の
研究」『横浜市歴史博物館調査研究報告』10
- 稲村繁 2014「埴輪からわかること」『大地に刻
まれた藤沢の歴史IV～古墳時代～』藤沢市